

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 塚越義幸著『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』

|       |                                                                                                                       |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 安保, 博史, Abo, Hiroshi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000515">https://doi.org/10.57529/00000515</a>                                     |

〔書評〕

塚越義幸著

『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』

安保博史

塚越義幸氏が、昭和六十一年から平成二十八年にかけて書き

継いできた二十八篇の芭蕉研究の成果に、漢詩作法入門書『詩法授幼抄』の翻刻、中国現代小説の一種の「微型小説」と俳句を比較考察した論を加えて一書にまとめ、『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』（おうふう・平成三十一年三月）を刊行された。塚越氏が四十年來、真摯に取り組まれた「芭蕉俳諧と漢詩文との関わり」の研究の蓄積が全五・二頁の大著となつて学界に提供されたことは誠に有難く、評者も和漢比較文学専攻の同志として心より感謝の念を捧げたい。

著者の研究生活の発端は、本書の「後記」に、「どのページも漢文ばかり、これが芭蕉の研究書なのか」と「大学で漢文学を専攻していた自分にとってはまさに興味津々」と回顧するよ

うに、仁枝忠氏著『芭蕉に影響した漢詩文』なる「良書」（「後記」所収、塚越義幸氏・七律「上梓」芭蕉俳諧所表現的漢詩文研究「有感」第一句）との出会いにあったが、母校の國學院大學での学びにあつては、学部時代の指導教授で、著者の芭蕉俳諧研究に理解を示された西岡弘氏、大学院時代に俳諧研究の専門的指導を受けた今泉準一氏の名を挙げ、「二人の恩師に漢文と俳諧とをご指導いただいた御蔭で、現在まで研究が継続できたのだ」（同右）として、本論集上梓を以て鴻恩に報いんとされたことは感慨深く、慶賀に堪えない。

本書は、序文に表明するとおり、芭蕉が漢詩文を「どう捉え（享受）」、「どう俳諧作品として昇華させたか（変容）」について考究しようとする姿勢に立脚して、五部十九章にわたり詳細な検証が重ねられていく。以下、紙幅の許す範囲で各章の論点や成果を概説し、二三の所感を付したい。

第一部「芭蕉俳諧と漢詩文調」第一章「漢詩文調の文体」は、新風俳諧に取り組む芭蕉が「漢詩文調」を単なる破調ではなく「常に和文体との共存の中で現れた文体」の新奇の要素を備えた作風として認識し、積極的に推進したとする。第二章「芭蕉俳諧にとって「詩」とは何か」は、芭蕉にとって「漢詩文調」が「一過性のものではなく、蕉風樹立に大きな示唆を与えた存

在としての意義」を持っていたと指摘し、芭蕉俳諧に表現された「詩」の概念を探る。第三章「俳諧合」に現われた漢詩文——芭蕉の判詞を中心に——は、『俳諧合』に記された芭蕉の判詞の中で、漢詩文を出典とする判詞が全五十番の約半数（二十三番）にのぼる事実、判詞に漢詩文を引いて判定を下した句のほとんどが「勝」とされている事実に着目し、延宝末期の芭蕉の「漢詩文重視」の傾向を精緻に実証し、説得力に富む。

第二部「漢詩文調期の芭蕉俳諧と杜甫」。第一章「田舎の句合」序考——「杜子が洒落」をめぐる——は、『詩人玉屑』卷之十四「李杜」の項の一節に見える「淡泊閑静」あるいは「風流醜藉」が「洒落」に近い「風流」なものであり、これらが「田舎の句合」の嵐雪序文の「杜子が洒落」の出所である可能性を指摘。著者の俳諧研究の達成度を示す卓説である。第二章「芭蕉の初期の草庵を場とする「わび」——杜詩とのかかわり——」は、伝統的な「わび」の追求と杜甫の「しゅれ」が一体化し、新たな「わび」が形成される過程を追ひ、「わび」を楽しむための「しゅれ」として杜詩が芭蕉に享受されていたと説く。第三章「深川移居前後の芭蕉俳文に現れた杜詩——その出典をめぐる——」は、著者の徹底的な資料渉猟に基づく労作。芭蕉の深川移居前後の俳文に見える杜詩の出典に注目し、夙に知られる『杜律集註』・

『杜律集解』・『古文真宝』・『聯珠詩格』・『詩人玉屑』・『水川詩式』・『円機活法』・『千家詩』・『詩林広記』・『唐詩訓解』など以外に、俳書や詩論・作詩入門書・韻書の類いにも拡大して出典を探索する。特に、寛文十年・同十一年・延宝三年の書籍目録にその名が見え、『詩学類語』熊谷了庵序文や『三冊子』蘭更序文に引かれる中国明代の韻書『五車韻瑞』（凌稚隆編）を出典源として発掘し得たことは、貴重な収獲である。第四章「芭蕉俳諧と『詩人玉屑』——杜甫の受容をめぐる——」は、『詩人玉屑』の詩話中の杜甫像がいかに芭蕉俳諧に反映されたかを考察し、『詩人玉屑』によって芭蕉が杜甫を意識し、理解を深めていく軌跡を詳述する。本書の特筆すべき見解であり、従いたい。

第三部「貞享期の芭蕉俳諧と漢詩文」。第一章「蕉風樹立期の芭蕉俳諧と漢詩文」は、貞享期の芭蕉の俳文意識が句との対立融和の上に成立したとする。第二章「四山の瓢」考——「素翁李白にかはりて、我貧を清くせんとす」——は、俳文「四山の瓢」に現れる芭蕉の清貧の意識と漢詩文の世界が素堂を媒介として俳諧化する過程を追う。第三章「蓑虫説跋」考——「離騷のたくみに、たり」——は、芭蕉の隠者指向に素堂の影響を指摘。俳諧史上の漢詩文調の問題にも関わり、興味深い。

第四部「おくのほそ道」と漢詩文」。第一章「田一枚植て

立去る柳かな」の解釈をめぐって―陸機「猛虎行」とのかかわり―は、『おくのほそ道鈔』（宝暦九年）の「田一枚」の芭蕉句の注釈の中に「渴シテ盗泉ノ水ヲ飲マズ、熱シテ惡木ノ蔭ニ息ズ」（原漢文）と、『文選』所収の陸機「猛虎行」冒頭二句が引かれる意味を考察し、「立ち去る」行為に、西行ゆかりの「柳」をも「惡木」と思い、長く憩うことを敢えて拒んだ旅人の「清廉な高志」を読み取る。近世期の古注釈を幅広く読解した著者ならではの新解釈。第二章「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の解釈をめぐって―は、杜甫「春望」首聯に対する宋の司馬光の説に導かれて、標記の一文の「山河」や「草」が国土の荒廢ぶりを象徴する「過酷で非情な自然」として捉えようとする見解を示し、「自然の永遠性」を説く通説に挑戦する。第三章「山刀伐峠越え」高山森くとして一鳥声きかず」の典拠をめぐって―は、当該文の典拠の一つとして、李白「荊州二テ舟ヲ浮ベテ蜀江ヲ望ム」（『分類補註李太白詩』卷二十二）なる古詩に見える「碧樹森森トシテ迎フ」を掲げ、独自の解釈を展開。第四章「山中温泉 曾良との別れ―「隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし」―は、「隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし」とし」が、『蒙求』所収「李陵初詩」の「隻鳧俱北飛、一鳧独南翔」を典拠としながらも、「隻鳧」を「隻鳧」に意識的に変

えて、曾良への深い惜別の情を表したと論証。著者ならではの読みの深さを堪能できる卓説である。第五章「『おくのほそ道』と漢詩文―その引用と解釈をめぐって―」は、本書の白眉。現存最古の注釈書『おくのほそ道鈔』における漢詩文引用箇所七十八箇所を悉皆調査し、その注釈内容の特徴を詳密に考察し、著者独自の「おくのほそ道」古注釈の研究モデルを作り上げたことを喜びとしたい。

第五部「芭蕉俳諧と漢詩文とその周辺」。第一章「『俳諧類船集』と漢詩文―「古文真宝」を中心に―」は、高瀬梅盛編の付合語辞典『俳諧類船集』収載の漢詩文の意義について考察する。第二章「芭蕉俳諧と『俳諧類船集』―「古文真宝」引用例を題材に―」は、『俳諧類船集』の引用漢詩文が芭蕉俳諧にいかに関与されたかを、『古文真宝』の引用例を通して検証する。第三章「芭蕉俳諧と楊貴妃」は、芭蕉俳諧における楊貴妃像の種々相を掲出する。第四章「俳諧に見える釈奠（釈菜）―其角句「聖堂にこまぬく蝶の袂哉」をめぐって―」は、「釈奠」の視点から其角句「聖堂にこまぬく蝶の袂哉」の新解釈を試みる。

巻末付録の榊原篁洲著『詩法授幼抄』（延宝七年刊）の翻刻は、当時の作詩法の解説の実態が具に知られ、有益至便である。学恩に感謝したい。

以上、本書収載の諸論考の概略をまとめ、聊か燕辞を弄したが、本書が、研究史上、廣田二郎氏著『芭蕉の藝術 その展開と背景』（有精堂出版・昭和四十六年）、仁枝忠氏著『芭蕉に影響した漢詩文』（教育出版センター・昭和四十七年）と並び立ち、令和の新時代の道標となることは間違いない。「遠山無限碧層層」、本書の成果を基盤とした研究の更なる発展を念じてやみません。

（A5判、五一二頁、おうふう、二〇一九年三月発行、  
一六〇〇〇円＋税）